

リサはショットグラスに入った酒をぐつとあおると踊る人々であふれかえっているダンスホールに向かった。人混みを泳ぐように進む先には白いシャツと黒いジーンズをはいた長身銀髪の男がいて、目の前にいるギャルと楽し気に踊っていた。

「サミジーナ！」

リサがサミジーナの肩を持って音楽に負けないように大きな声で呼ぶと、典型的なヨーロッパ系である彫りの深い顔がこちらを振り返った。

「なんだい！？」

「その子じゃなくて私と一緒に踊ろうよ！」

「みんなと一緒に踊ればいいだろう？！ねえ、この子も一緒に踊って良い？！」

相手のギャルはリサの顔を見ると親指を立てるジェスチャーで了解の意志を伝えた。

「ほら！」

サミジーナに手をひかれリサは半ば強引に踊りの輪の中に引き込まれてしまった。

（うわ、せま！？）

リサは最初踊りづらそうにしていたが、だんだん慣れてきて2曲か3曲踊り終わる頃にはそれなりに楽しんで踊れるようになっていた。

「あたし飲み物もらってくるー。じゃあねー」

ギャルが去った後、サミジーナはリサの手を取って通路にある喫煙ルームに入った。

「二人だけで踊りたいなんて、嫉妬かい？」

リサは煙草に火をつけるとサミジーナのその問いかけにぶいっと顔を背けることで答えた。

「まったく、君はいつになつたら自分の気持ちに気が付くんない？」

そう言いながらサミジーナは煙草を取り出すと喫煙所内に自分たち以外をいなくを確認すると指先から火を出して煙草に火をつけた。

「気が付いていない訳じゃない。言いたくないんだ」

「俺が気づけっ言う奴？それって相手が察しの悪いのだったら無理ゲーだよ？」

「説教される筋合いはない」

そう言いながらリサが灰皿に灰を落としてしていると、サミジーナは煙草の火に軽く息を吹きかけ火花を散らしていた。

「それ、いつ見ても凄いよね。魔法だったっけ？」

「そう。テキストに暇な時によくやってる」

「スマホいじりながら煙草吸っている感じ？」

「当たり前。人間の世界だとそうなるね」

そう言いながらサミジーナが煙草の煙を吐くと中から煙草の煙と同じ色の小さなゴーストが現れすぐに消えた。

「今のって、確か幻術って言うんだっけ？」

「そう。俺が率いている死霊軍団に使う媒体。奴ら肉体がないからこうやって媒体をあてがってやらないとこの世に現れるのができないんだよな」

「・・・もしかして今のってサミジーナの部下？」

「いや、この辺にいる死霊を適当に呼び出した」

「え！？この辺に幽霊なんているの！？」

リサの言葉を聞くとサミジーナは視線だけリサの方に向けた。

「こういううるさくて楽しくそんな所には元々死霊が集まりやすいんだ。ここには地縛霊とかそういうたぐいはないから安心して」

「え・・・？でも幽霊がいるんじゃないけど？」

「悪魔と一緒にいる奴が説得力ないんだけど？」

「え？！だってサミジーナは悪魔って言ったも悪魔って感じじゃないし・・・」

「なんだよ？人間界に観光に来た悪魔ってそんなに拍子抜けするものなの？」

「え？・・・だってなんか普通の男って感じて・・・」

リサがそう言うとサミジーナはニヤリと微笑みながら煙草の灰を落とした。

「リサがそう思うなら、俺の演技が上手いって言う証拠だな。これでも一応人間を観察しているんだぜ？」

「そうなの？じゃあもし人間のふりするの止めたらどうなるの？」

リサが質問をすると、喫煙室のドアが開いて他の人間が入ってきた。

「さあね」

サミジーナは一言そう言うと煙草の火を消し喫煙所の外に行った。